

姫路城城下町跡

—姫路城跡第338次発掘調査報告書—

2017

姫路市教育委員会

序

姫路城は本市の象徴であるとともに、我が国を代表する文化遺産の一つです。江戸時代初期に池田輝政によって五重六階、地下一階の大天守が聳える姫路城が築かれ、その後400年間歴史を刻み続けています。近年は5年を要した保存修理工事が完了し、「白鷺城」と呼ばれるに相応しい白亜の大天守がその姿を現し、話題になりました。

その大天守が聳える姫山の麓に広がる城下町は、三重の堀によって、藩の中枢が置かれた内曲輪・武家屋敷が建ち並んだ中曲輪・町人地・寺社地・武家屋敷地などで構成される外曲輪に区画されています。現在、内曲輪・中曲輪の大半が世界遺産及び国の特別史跡として保護・顕彰が図られ、外曲輪では姫路市の中心として中核市に相応しい街づくりがおこなわれています。

今回報告する姫路城跡第338次調査は、外曲輪南東部の町人地であった平野町39番・40番で実施し、近世の町屋に伴う遺構が多数みつかりました。さらに、その下層でみつかった古代の溝からは大量の瓦が出土しました。調査地付近は古くから「播磨国府」の推定地とされてきたこともあり、新聞報道などで注目を集めました。

ここにその成果を報告し、姫路城城下町跡及びその下層遺跡の調査研究の進展に資する所存であります。

最後に、事業実施にあたり、多大なご協力を賜りました合同会社都市開発システムズその他関係各位に心から御礼申し上げます。

姫路市教育委員会
教育長 中杉隆夫

例言・凡例

1. 本書は、姫路市平野町39番・40番で実施した姫路城跡第338次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、合同会社都市開発システムズによる共同住宅の建設に先立って実施した。
3. 発掘調査は合同会社都市開発システムズの委託を受け、姫路市教育委員会が実施した。現地調査及び整理作業、報告書の編集は、姫路市教育委員会生涯学習部埋蔵文化財センターが担当した。
4. 調査区平面図の作成に際しては世界測地系を使用した。本書で使用する方位は全て座標北である。また、標高は東京湾平均海面水準(T.P.)を基準とした。
5. 土層名は、『新版標準土色帳』(1999年度版)に準拠した。
6. 本書で使用する遺構番号は、遺構種別号は次のように呼称する。
SB：掘立柱建物 挖立柱列：S 槽：SP 溝：SD 土坑：SK SE：戸井
7. 出上遺物の年代や分類は、参考文献著者の姓の後に分類名を記した。 例：土器師焰燒（中川H類）
8. 本書に記載する遺物・写真・図面は、姫路市埋蔵文化財センターで保管している。
9. 調査及び報告書の作成にあたっては、以下の方々のご援助を頂いた。(敬称略・五十音順)
青木 敏 小田裕樹 工藤茂博 合同会社都市開発システムズ
福田剛史 山中敏史 有限会社松浦興業

現地調査開始から整理作業終了までの体制

姫路市教育委員会	課長補佐	岡峰政俊	(～平成28年3月31日 係長)
教育長 中杉隆夫	係長	森恒裕	
教育次長 林 尚秀 (～平成27年6月30日)	技術主任	小柴治子	
八木 優 (平成27年7月1日～)		福井 優	
生涯学習部 長 植原正則 (平成27年7月1日～)		中川 猛	
文化財課 課長 福永明彦 (～平成27年6月30日)	主事	閑 梢 (～平成28年3月31日 技師)	
花幡和宏 (平成27年7月1日～)	技師	黒田祐介 [現地調査・整理担当]	
課長補佐 大谷輝彦 (～平成28年3月31日 係長)	嘱託職員	黒岩紀子、香山玲子、清水聖子、	
技術主任 南 憲和		田中章子、玉越綾子、野村知子、	
埋蔵文化財センター	整理補助員	松田聰子、三輪悠代	
館 長 秋枝 芳 (～平成28年3月31日)		寺本祐子、藤村由紀	
前田光則 (平成28年4月1日～)			

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯と経過 1
第2節 調査地の位置と既往の調査・研究 1
第Ⅱ章 調査の成果	
第1節 基本層序 2
第2節 本発掘調査の成果 2
第Ⅲ章 総括 6

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と経過

姫路市平野町39番・40番において、合同会社都市開発システムズによる共同住宅の建設に先立って実施した。当該地は周辺埋蔵文化財密度である姫路城下町跡(県道番号020169)に該当しているため、平成27年(2015年)4月4日から9日の実施4日で調査区13箇所、計46m²の確認調査を実施した(調査番号20150112、姫路城跡第333次調査)。その結果、近世の遺構が良好に残存していることが判明したことにより、下層遺構から布目瓦が多数出土した。この成果を踏まえて、事業者と姫路市教育委員会生涯学習部埋蔵文化財課が協議をおこない、事業者の協力を得て工事範囲772m²を対象に本発掘調査を実施することになった。

事業者は2ヶ月にわたり、平成27年度は発掘調査及び出土品整理、28年度は出土品整理及び発掘調査報告書の作成・刊行の計画であった。平成27年6月16日に「姫路市平野町39番・40番の開発に伴う埋蔵文化財(姫路城下町跡)に関する協定」、「姫路市平野町39番・40番の開発に伴う埋蔵文化財(姫路城下町跡)」(平成27年度)発掘調査委託契約を締結し、平成27年度事業を開始した。

本発掘調査(調査番号20150112、姫路城跡第338次調査)は6月25日から10月28日の約1ヶ月間で実施した。各調査区の調査は、1区西半を6月25日から7月27日、1区東半の近世遺構を8月1日から9月24日、1区東半の中世・古代遺構を9月25日から10月10日、2区の近世遺構を8月6日から9月24日、2区の中世・古代遺構を9月25日から10月28日にそれぞれ実施した。

平成28年度は4月1日に「姫路市平野町39番・40番の開発に伴う埋蔵文化財(姫路城下町跡)」(平成28年度)発掘調査委託契約を締結し、出土品整理及び発掘調査報告書作成を開始した。平成29年(2017年)3月31日の発掘調査報告書の刊行をもって本事業を終了した。

調査で得られた成果の一端は、平成27年10月14日の記者発表や10月16日の現地説明会開催、姫路市埋蔵文化財センターで平成28年4月24日から7月18日まで開催した企画展「発掘調査速報展2016」へのパネル・出土品出展等を通じて公開をおこなった。

発掘調査中の平成27年10月16日には兵庫県教育委員会文化財担当職員の来場を得て、姫路市教育委員会文化財課及び埋蔵文化財センターの3者で遺跡の評価・取扱いについて現地協議をおこなった。

第2節 調査地の位置と既往の調査・研究

姫路城は、池田輝政により慶長六年(1601年)から9年の歳月をかけて築かれた平山城である。大天守が築かれた姫路を中心にお堀、中堀、外堀の三重の堀がめぐらされ、武家屋敷や町屋などを囲い込む懐構の配置が採られている。今回調査を実施した平野町39番・40番は大天守から南東に約1kmの外曲輪に位置しており、絵図によると、西国街道に面した町人地であったことがわかる。この区域の町屋に関する史料は知られていないため、住人の名や生業等の詳細が明らかでない。調査区は南北27mと通常の町屋の面積を大きく上回っていたため、数軒分の町屋の敷数が統合されていることが推測された。土地の來歴について詳しく述べていっていないが、大正期の地図では調査地は既に1つの敷地になっていたり、昭和5年(1930年)には料亭があったとの伝聞情報がある。

今回の特徴すべき成果としては、城下町遺構の下層から古代の遺構が確認されたことが挙げられる。これに付いてこれまでの研究の蓄積がある。古くから歴史地学者によって堀山の東麓一帯を播磨國府に比擬する考察がなされてきた。昭和56年(1981年)の発掘調査では、調査地から北東400mに所在する姫路郵便局(本町遺跡、県道番号020465)の敷地内で、方形掘方をもつ掘立柱建物などが検出され、避難状態ではあったが瓦が大量に出土したことで瓦葺き物の存在も推測された。さらに、遺構の変遷から8世紀後半には遺構の主軸がほぼ真北方向を指すようになることが明らかとなつた(姫路市教育委員会1984、山本・山本・今里2010)。それまでに知られていた瓦の分布範囲が敷市町に及ぶことに加え、発掘調査によって明らかとなった建物の特徴や瓦葺き物の存否、遺跡の変遷の在り方などから当地が地方官衙遺跡、特に播磨國衙跡である可能性が提示されるに至つた(山中1984)。また、それらの建物群が費司か国司館にあたり、政府は調査区南方に存在する可能性が示された。しかし、その後の姫路城跡・姫路城下町跡の調査の進展にも関わらず、この時期の遺構の発見は散発的で、まとまった成果には恵まれていない。

調査地の近辺に目を向けると、調査地の北東約100mにかつて所在した心光寺境内からはほぼ完形の古大内式軒丸瓦が出土し、本町式軒丸瓦が屋根に葺かれていたといふ。また、先述のよう8世紀後半に降の遺構の主軸が正方位を探ることが判明しているが、調査地周辺では街路などの地割りが正方位に近い方位を採っており(塙田1988)、木下良氏による播磨國府想定範囲とも重複している(木下1984)。また、調査地から南西700mに所在する豆脳山遺跡(県道番号020459)では計画的に配置された建物群や井戸、道筋がみつかり、墨書き器や転用鏡、輪羽口、譲付着器などが出土した。これらの成果から国府に隣接した施設が置かれていたと想定されている。

第二章 調査の成果

第1節 基本層序

現地表は、標高約14mである。2区北壁西半をみると、現地表から近現代の盛土約40cm、近世の土層約40cm、城下町築造以前の土とみられる褐色土色（以下、中世様）30cmを経て、標高約12.9mで地山に至る。

なお、主な遺構検出面としては中世耕土上面と地山上面があり、前者で近世遺構を、後者で古代及び中世の遺構を検出した。さらに、1区東半と2区では、近世およびその時期の可能性のある石組遺構が多数確認されたため、上面でも適宜的な調査をおこなった。また地山は褐灰色粘土層からなり、その下層に黄色粘土層、砂礫層が認められた。通常古代以前の構造埋土と地山である褐色粘土層の色調が酷似していることから、遺構を見逃している可能性も考慮して調査最終段階で黄色粘土層までの掘り下げをおこない、再度遺構検出に努めた。なお、地山からは遺物は出土せず、井戸の断ち割りに伴って下層の確認をおこなつたが、遺構面は確認していない。

第2節 本发掘調査の成果

調査では近世、中世、古の遺構を確認した。紙幅の制約から、本章では全体の様相等、特に重要な項目についてのみ触ることにする。個別の遺構の詳細については一覧表（表1）にまとめたため、そちらを参照いただきたい。

1. 近世の遺構・遺物

今回確認した遺構は、土坑、溝、井戸の他、礎石、石組基礎、石組構、石組、さらに埠列建物や布掘掘方に礎石を配置した建物（以下、礎石立建物）など多岐にわたる。

遺構の概要 1区西半や2区の一部は擾乱が顕著であったため得られた情報に欠落はあるが、全体的な傾向は以下の3点に集約して整理することができる。それは、①調査区西半には土坑など地面を掘り下げるタイプの遺構が少なく、礎石が確認される、②調査区東部には井戸が集中している、③調査区東半には土坑が多数認められる、である。これらを既往の調査の成績と照合すると、間口側に建物が立ち、奥に施設を土坑（空閑地）が広がり、その間に井戸などの水回りの施設が配置されるという、船堀城域下町の町屋として一般的な構造を持つことが指摘できる。ただし、1区では裏手の遺構密度が2区と比べて明らかに低いため、通常と異なる土地の利用方法があるかも知れない。また、近世遺構の主軸は、概ねN-T-Eである。

町屋部 磚石には欠落が多く、建物の間取りなどを明らかにできるほどの情報は得られていない。比較的残りの良いかった2区では、その西半（開口側）で礎石を確認した。礎石上面の標高は13.7m/13.6m/13.5m/12.4m/13.25mなどがあり、複数回の建て替えが想定できる。1区西半は大部分が擾乱を受けていたものの、調査区東壁で礎石4基（2基・上面標高13.5m、心間距離0.8m/2基：上面標高13.3m～13.4m、心間距離1.1m）と北壁で1基（上面標高13.5m）が確認された。また、1区西半中央部では大規模な礎石が確認された。これらは町屋に伴う礎石にしては大型で、かつ根固めが強烈であつたことから、通常の町屋に伴うものとは考えにくい。現状ではこれらがどのような施設に伴う礎石か不明とするを得ないが、根固石が10cm以上地山に押し込まれていたこともあり、礎石に荷重が大きくなるような建物であつたことは間違いないだろう。明確な期別は不明だが、礎石上面の標高から推測するに近世中期以降のものといえるのではないか。なお、礎石の直上には南北方向に延びる土壁がえらばれていたことから、近代以降も何らかの機能を果たした可能性がある。

石組基礎 石組基礎は5基を確認した。石組上面の標高から、いずれも近世後半以降のものと考えられる。そのうち、石組基礎1・2・3は方形の石組みとその中央に礎石が据えられる点で共通し、中央礎石に据えられた柱で棟を支えるという構造が復元できる。しかし、石組基礎1・2の石組は約0.5mの高さがある一方、石組基礎3の石材は基本的に一段で、構造に大きな違いがある。また、調査区の制约はあるものの、確認しうる限り石組基礎2の南辺から南には石組に続いているかった。このことから石組基礎1・2・3はその配置に規則性があるようにみえるが、後述する石組基礎2・3間の敷地境hが同時期に機能していた可能性があり、その場合それぞれ別の敷地に属していたことになる。そうでない場合は、石組基礎1・2と石組基礎3の間にある構造上の差異は構築時期や建物の使用方法の差異を反映している可能性もある。また、石組基礎1・2同じ構造で石組に前後関係がないことから同時に構築されたと考えられる。石組基礎2の南辺と一連の石組を共有する石組基礎4は、石組基礎1・2とよく似た構造をもつ。単独で存在する石組基礎5は、残存状態の悪さのために石組の特徴が認めてならない印象を受け。基礎内に石組や礎石の可能性がある石材を散在していたが、確實に本遺構に伴うものはない。これら5基の石組基礎はいずれも礎石に伴うものと考えられる。

石組基礎を伴う建物の入り口として階段など踏跡なもののは確認されていない。石組基礎2西側と石組基礎4の北端には東西方向の石組（石組5・6）が部分的に確認され、入口に向かう通路に伴うものの可能性がある。また、石組基礎1・5間に近世以降の庭石など（直接戰災焼土をかる）がみられたが、これも入り口の位置を考える上での手がかりとなるのかもしれない。

埠列建物と埠 姫路城下町跡において、全形がうかがえる埠列建物が確認されたのは今回が初めてである。1620年代か

ら30年代の良好な一括資料が出土したSK14の上に構築されていたため、それ以降の時期の遺構とできるが、下限となる年代が判断としない。SD2の出土遺物の年代との兼ね合いから17世紀中期の年代を与えておきたい。

埠は一部2段階分離された。埠の據え付けについては、西辺では礎力方は確認されておらず、盛土（石組A-A'断面、3~7層）をしながら據え付けた可能性が高い。一方、北・東・南辺では礎力方とみられる土質の違いが認められたため、埠の據え付けは礎力方を伴っていたと考える。この構築方法の違いがなぜ生じるかは不明である。

出土した埠建物に伴って出土したもの75個器、その他近辺より遺棄して出土したものも含めるとさらにその数は多くなる。前者のうち、完形もしくは礎・横樋の2辺以上に残存していたものは18個体であった。その大きさからI類（縦23.9±0.2cm/横23.5±0.3cm/厚2.4±0.2cm）とII類（縦25.7±0.2cm/横24.2±0.1cm/厚1.6±0.1cm）に分類でき、前者は15点、後者が3点という比率であった。これらの計測値のうち最も顕著な差がみられた厚みに基づいて、残存率が一辺以下の個体も含めて分類すると、I類50点、II類25点であった。なお、II類のうち21点は東辺に出土して使用されていた。その他、埠列建物内の掘り下げ中に、犬形土製品が出土した（図8-2）。埠列遺構は不明であるが、埠列建物に伴う盛土からの出土の可能性がある。なお、埠は1区の近世遺構のうち17世紀前半に属するものからの出土が自立、中世の埠SD101からも多数出土している。

礎石立建物と埋甕群 「コ」字形の布掘掘方と共に据えられた礎石を礎石立建物として把握した。礎石は北・東・南の「コ」字形に配されているが、西では礎力方で確認できおらず、もともとなかった可能性が高い。また、礎力方の北辺と南辺で長さが大きく異なる。なお、東辺遺構として北辺掘方につながるよう延びる構造を確認したが、これは中世耕土の下層の構造であることが確実であるため、本遺構とは無関係である。また、礎力方に埋まれた空隙の中央では、礎力方根固めを伴う凝灰岩の大型礎石が確認できた。これと対応する位置にある東辺礎力方の中央の礎石も凝灰岩で、大きさや根固めが伴う点で共通している。これらの間に標高に0.7mの差があるが、その理由は不明である。出土遺物や遺構の切り合いから概ね17世紀前半の東の遺構とおきておきたい。

礎石立建物の内外には約30基の埋甕痕跡が確認されており、總合として「L」字形の配置をしている。埋甕は東西南北ほぼ一定間隔でみつかっていることから、同時に機能が高いだろう。礎石立建物東辺においては礎石掘方が埋甕群に埋め込まれていて、礎石立建物と埋甕群の間に何時併存している直接的な関係はないと考えている。なお、この埋甕群が露天であったと考えにくければ、この範囲を覆う建物が存在した可能性を考慮すべきだろう。もっとも、その根跡は確認されておらず、礎石立建物との切り合いが確認されたのが一部の埋甕に限られているため、礎石立建物内部に位置している埋甕がこの建物に伴う可能性は否定できない。

敷地境 今回の調査地は、第1章節で触れた通り複数の町屋に該当していると推測され、確認した遺構の中には敷地境間に埋まっているものも含まれていると考えられる。今回、掘立柱柱や溝、石組といった区画遺構や敷地境と評したほか、敷地境が機能している期間はそれを越えて遺構が広がらないことを前提に、遺構の空白や切れ目から推測したものもある。敷地境の可能性があるのは図3-4に「a」～「j」で表示した10ラインである。なお、これらの敷地境推定ラインには近接するものもあるが、敷地境の移動を反映している可能性はあるだろう。

以下で示す敷地境推定ラインのうち、「e・h・i・j」は確実な敷地境といえる。**a:**埠列建物北端を基準として設定した。このラインはその後の時期の石組1や敷地境で特徴的にみられる細長い土塙SR2が認められ、石組基礎1の北辺石組もほぼこのラインに重なる。**b:**石組基礎5の北辺を基準にして設定した。**c:**SD1の位置を基準として設定した。石組2もこのラインに重なる。**d:**石組構2である石組3を基準として設定した。**e:**SA1とSD2の位置を基準として設定した。SA1がSD2に先行し、このラインを越える遺構はない。また、石組基礎1・5の南辺にこれとほぼ重なる位置にある。**f:**礎石立建物北辺と埠列建物南辺の位置を基準として設定した。礎石立建物周辺の埋甕群がこのラインに沿って配置されている点もこれで敷地境と考える根拠である。**g:**石組4と石組9の位置を基準として設定した。これより新しい時期の石組基礎4北辺もこのラインに重なる。**h:**礎石立建物南辺や石組7・8を基準として設定した。なお、これより新しい時期の石組基礎2・4南辺もこのラインと重なる位置にある。**i:**SA2とSD3、石組構である石組14の位置を基準に設定した。**j:**SD4及び石組基礎3南辺、石組10・12・15・16を基準に設定した。

以上、敷地境として想定した10ラインについて概観した。特にiにみられた掘立柱柱（廻り、SA2）から素掘溝（SD3）、石組構（石組14）という変遷は、姫路城跡第289次調査（姫路市埋蔵文化財センター編2014）でも確認されており、姫路城下町跡の町屋における敷地境遺構変遷の典型的モデルの1つといつて差し支えないだろう。また、eでは掘立柱柱（SA1）から素掘溝（SD2）へ、cでは素掘溝（SD1）から石組（石組2・石組構）の可能性あり）へといき変遷を追うことができる。cと同様の変遷はjにも認められ、(石組15・16)が同じ位置で造られていることから、継続して敷地境として機能したことがわかる。なお、石組基礎2・4が造られた時期にこのラインが敷地境として機能していた可能性もあり、そうであれば石組基礎2・3間の構造の違いが生じた原因についても説明がつく。「j」は石組基礎5が造られた段階では敷地境として機能していたと考えていいだろう。次に敷地境が機能した時期を、表1に記した各遺構の年代から導いてみよう。**e**は17世紀中葉とみられる埠列建物を切

ことからそれ以降の敷地境と考え、さらに、18世紀の遺構がこのラインで途切れていることからこの時期までは敷地境として機能していることがわかる。また、石組基礎1号が構築されるまでには敷地境として機能していたと考えられる。hは17世紀後半のものとした礎石立壁に始まり、石組7・8や石組基礎2・4がこれに沿ったため、近世を通じて維持された可能性が高い。iは17世紀後半の遺物が出土したSD3とそれに先行するSA2があるため17世紀から機能し、18世紀の石組14までその機能を果たしたものとみられる。その後、18世紀末頃にjに敷地境が移動したと考えられる。また、近世の初期、石組基礎1・2が造られる時期には、a~hの敷地がlになっていた可能性が高くなっている。

地鎮物 2区中央において鉄筋が施設裏蓋内に納められた状態で、正位置で出土した（図8-3、4）。松江市下町道路等では鉄筋が木箱に納められた状態で出土した事例が知られており、その類似性から地鎮に関連しているものと評価した。出土標高が13.55mと比較的高いため、近世のなかでも後半以前のものと推測される。

西国街道 街路にわける遺構は確認していない。1区西壁では、町屋の礎石が確認されているため、現在の道路は西国街道を東に拡張して築造されていることが判明した。

2. 中世の遺構・遺物

この時期の遺構は、城下町築成以前の耕土とみられる灰色粘質土（中世耕土）除去後の地山上面で確認した。柱穴約160基、掘立柱1条、溝約10条などを確認した。柱穴は多数あるが、建物として把握できたものはない。まとまった遺物が出土した遺構がほとんどなく、時期の特定は困難である。なお、この時期の遺構埋土はいずれも灰白色を呈し、遺構主軸は概ね正方位を探る。

3. 古代の遺構・遺物

この時期の遺構、もしくはその可能性がある遺構は1区南端から2区にかけて確認した。遺構としては、掘立柱建物1棟、溝7条がある。いずれも正方位を主軸としている。

SB101 東西2間、南北1間、計4基の柱穴を確認した。主軸は正方位を探る。柱穴掘方は1.2~1.4m、柱径の径は約30cmを測り、東西の心窓距離が1.8m、南北の心窓距離が2.2mと一定ではない。現状ではSB101の性格は明らかでなく、最終的な評定は隣接地の調査を待たれるを得ない。今回は建物として報告しが、その他の可能性には隙などの遺物も入れるべきだろう。上部は削平を受けていたため基礎の有無は不明である。

SD104と異 SD104は、SB101の直西で途切れる大型の構（長大な土坑の可能性もある）で、調査区西方へ続く。主軸は東西正方位を探る。その位置関係からSB101と併存している可能性がある。また、そうであったとしてもSB101側で急に途切れる理由があるが、現状ではSB101との関係以外の理由がないだせない。SD104からは瓦類が大量に出土した。瓦の出土層は構造土の中位（中層）である。

瓦の出土状況には粗密があり、特にx=33410~33425の約15mの範囲の密度が特に高い。瓦の遺存状況は良好で、完形やそれに近いものが多数検出された。出土状況からは瓦の上下や平瓦の広沢、丸瓦、平瓦の出土位置などに規則性は認められず、建物屋根から直接落とした様子ではない。さらに、後述するように出土した瓦は瓦片が圧倒的多数で占め、軒瓦や丸瓦が破損するほど少ない状況を考慮すると、瓦の葺き替えもしくは建物の造営に際して、不要・不適合な瓦を選別し廃棄した可能性が高くと考える。また、先述のとおり瓦を出土したのが土の理土の中位であったことから、瓦が投棄されるまでの一定期間が開けられた状態であったと考えられる。ただし、瓦の下で埋土の明瞭な色調や土質変化が認められず、同一の層としても差し支えない状態であった。さらに、流水や溜水の痕跡も認められないことから、本遺構が長期間にわたって機能していたとは考えにくく、短期間に埋められた可能性が高い。

出土した瓦は全重約1,424kgを測り、その内訳は軒丸瓦3.0kg、軒平瓦17kg、丸瓦61kg、平瓦1,262kg、道具瓦1.5kgである。平瓦については膨大な出土量ゆえに、整理作業では出土時と同様もしくはそれに近い状態で出土したものを中心に図化をおこない、現在確認しうる正面タキ目（タキ目）の類型の紹介に重点を置いた。そのため、将来再整理した場合には、タキ目（タキ目）の類型がさらに入れられる可能性がある。

椭圓の軒瓦については、今里幾次氏を中心研究が進められてきた。以下では、今里氏の用いた呼称を使用する。軒丸瓦は2点出土した。瓦当文様はいずれも単耳十三葉蓮華文「古大内式」である。軒平瓦は4点出土した。瓦当文様はいずれも均整草文で、1点は破片で「古大内式」、他3点は「北宿式」である。「北宿式」軒平瓦には、范型の被りや棒状痕が認められる。

丸瓦は半が破片で、瓦線の数からおよそ30個体の出土が確認できる。「点のみ無段式（行基式）」丸瓦があるものの、その他はすべて段式（玉絞式）である。また、後のうらう点のみ瓦線に引きが確認できる。側縁調整などに基づいて分類をおこなったが、全形がわかる資料が乏しく詳細な検討ができる状況はない。

瓦は瓦全体量の94%を占める。凸面タキ目は様々な形態が認められ、分類が可能な平瓦の純重量は1,070kgである。今回確認した類型としては別で5種類があり、タキ目（タキ目）の分類表記は、タキ目の形状による大別を「網目、斜格子、正格子、平行・斜格子、無文」、タキ目を構成する条線の角度などの特徴による細別をアルファベット「A, B, C, D, E, F, G, H, I, J, K, L, M, N, O, P, Q, R, S, T, U, V, W, X, Y, Z」で表示し、

さらに細分が必要な場合は「A1, A2, A3, …」表記する。以上の分類による類型内でのタキ目原体の違いをローマ数字「1, 2, 3, …」と表記した。なお、同一原体によるものかどうかは、拓本を重ねることで確認した。今回は明確に区分できるものを類型として取り上げた。

①「網目」：縦の網目タキをA類、横のものをB類とする。出土重量1kgとわずかであり、小片ばかりのため、回細分はおこなわない。今回出土した瓦はネット關係にない可能性が高い。

②「斜格子」：格子を構成する条線が傾斜に斜交するもの。出土重量214kg。タキの大きさが一辺2cm以上のものが約70%を占める。格子の大きさや形状から8類型に細分した。

③「正格子」：格子を構成する縦条線が側縁に平行するもの。また、これに交わる横条線が全て直交するものをA類、斜交する条線があるものをB類とする。

正格子A：出土重量625kg。格子の形が長方形か正方形かで大きな分類が可能ではあるが、1つのタキ目において全ての格子が厳密に同じ形狀であるは限らない。このため、この属性に基づいた細分をおこなわないことにした。ちなみに、えて分類すると長方形のものが約70%を占める。今回は格子の形狀・大きさから5類型に細分した。なお、今回確認したものは1つのタキ目内で格子の形狀・大きさに明確な変化はみられない。そのような変化があるものがみつかった際には細分が必要だろう。

正格子B：出土重量147kg。横条線の様相から3つに細分した。

B1：全体が斜交するタイプ（59）。

B2：広端側へ斜くは扶端側の横条線が斜交するタイプ（60~64）。

B3：横条線の方向が広端側と扶端側で異なる「ハ」字形になるタイプ（65）がある。

④「平行・斜格子」：側縁に平行する縦条線と斜格子が一起のタキ目で縦条線の方が突出している。出土重量58kg。今回確認したのは1種類のみである。

⑤「無文」：凸面にタキ目によるとみられる側縁平行の段差がみられる。砂粒の動きがみられないことから、タキ目をナデ消したわけではなさそうである。出土重量25kg。

なお、通常平瓦1個につき1原体によるタキ目が施されるが、47では小型の正格子（正格子A-1）と40と同じとみられる大型の斜格子（斜格子B-2）が共存している。このように別形態のタキ目が同一個体で共存する例は、この1点だけである。なお、タキ目切り合いで隣接から斜格子タキ目が古く、その後に正格子タキ目が施されているという順序が復元できる。

タキ目原体の幅については正格子Bの39では6cmである。長さは、一連のタキ目が平瓦広端から扶端までをほぼカバーしているため、平瓦の長さにほぼまちがいなく考えられる。

平瓦には、凸面に叩き込んだ円弧がみられないことに加え、凹面には側縁平行の布端の痕跡がみとめられるものがあることから、一枚作りによるものと考えられる。

側縁調整については、4類型に分類した。1類は無調整、2類は面側面に面取りをおこなうもの、3類は凸面側に面取りをおこなうもの、4類は凸面側・面凹側両方に面取りをおこなうものである。今回図化した個体については、2類がほとんどを占めている。また、例外として広端角部と扶端角部に面取りが施されている個体（46）が確認できる（写真47、48）。

各部位の計測値については、タキ目各類型の間で明確な差はみられない。また、同一のタキ目原体による個体間、特に正格子A-1（57・58）や斜格子B-2（63・64）、「平行・斜格子-1（66・67）」では近似した数値を示している。布目については、今回分類の布目にはならないようである。凹面調整としてはタテナデが施されるものが目立ち、広端部・扶端部に調整（面取りや強いナデ）が施されるものが多い。現状ではこのような製作時の手法差からはタキ目類型に対応するような明確な差は認められない。

その他、出土遺物として須恵器や土師器がある。今回は図化に耐えるものの大部分を掲載した（図19）。まず、上層から出土した資料（1~18）は、SD104が完全に埋没した段階の資料または遺構上に堆積した包含層の遺物が混入した可能性が考えられ、直接この遺構の時期を示すとは考えられない。特にx=33410~33415の範囲にこの土層の遺物が多く（1~12）、10世紀の遺物が含まれている。瓦に混じて出土したものの（中層）としては19~21があり、19には漆が付着していた。瓦が投棄される以前に堆積していた土層（下層）からは22~25が出土した。その他、出土した須恵器は写真44に掲載した右下の1点が下層出土である以外は全て中層出土のものである。

SD104及び投棄された瓦の年代を示すと考えられる中、下層出土の須恵器は、概ね8世紀にその年代を求めることができるだろう。また、軒瓦のうち「古大内式」は破片での出土のため、今回出土の瓦と本来セッタ関係にあるかは不明で、「北宿式」については完全に近い状態であるためセッタ関係と考えていいだろう。「北宿式」については今里氏の年代観によれば9世紀中頃とされているが（今里1978）、検討の余地が残されている。

SK2	1区東半	SK12	古墳墓墻に切られる。長軸約3m、短軸約6mの長方形を呈し、深さ0.1mを測る。土は砂礫で、人為的に堆積されたと考えられる。周辺は非常に少なく、且と遺伝地盤（高さ僅か時化鉱物あり、底面は2段階）がある。
SK3	1区東半	SK80	石垣基盤と石垣上部、馬鹿塚壁（高さ僅か時化鉱物あり、底面は2段階）がある。
SK4	1区東半	SK74	石垣基盤と石垣上部、馬鹿塚壁（高さ僅か時化鉱物あり、底面は2段階）がある。
SK5	1区東半	SK64	SK6を残り、石垣基盤に切られる。長軸約2m、短軸約1.6mの楕円形を呈し、深さ0.3mを測る。遺物は非常に少ない。馬鹿塚壁（鉄板状張り目）、人馬塚（土と木の構成）。
SK6	1区東半	SK83	SK6を残り、石垣基盤に切られる。長軸約2m、短軸約1.6mの楕円形を呈し、深さ0.3mを測る。遺物は非常に少ない。馬鹿塚壁（大日形）、人馬塚（土と木の構成）。
SK7	1区東半	SK13	SK6を残り、石垣基盤に切られる。長軸約2m、短軸約1.6mの楕円形を呈し、深さ0.3mを測る。馬鹿塚を特徴とする遺物はない。
SK8	1区東半	SK7	1区2.2mの地形図。深さ0.6~5mの高さ、東西系地盤混在地盤（白神・型式）などと既知の中世の時代を示す。
SK9	1区東半	SK19	1区2.2mの地形図。深さ0.6~5mの高さ、底面は2段階を呈し、深さ0.1mを測る。遺物は少なく、背芦塚、肥前系陶器陶輪、鐵（動土目と目印）、大標1・Ⅱ期、土解（底面直角）、底面直角などがある。
SK10	1区東半	SK15	1区2.2mの地形図。底面は2段階を呈し、深さ0.3mを測る。遺物は多く、奈良系陶器（こんなじやくと印押、大標Ⅰ期）、南西系地盤混在地盤（白神Ⅱ型式）などがある。
SK11	1区東半	SK65・66	SK2、SK1を残り、底面は2段階を呈し、深さ0.3mを測る。馬鹿塚（大日形）、南西系地盤混在地盤（白神・型式）などがある。
SK12	1区東半	SK72	SK12、馬鹿塚に切られる。長軸約3m、短軸約1.6mの楕円形を呈し、深さ0.3mを測る。背芦塚、白蘿（菊花）、肥前系陶器陶輪（大標1・Ⅱ期）、土解（底面直角）、底面直角（大日形）、南西系地盤混在地盤（白神・型式）などがある。
SK13	1区東半	SK81	SK12、馬鹿塚に切られる。長軸約3m、短軸約1.6mの楕円形を呈し、深さ0.3mを測る。背芦塚、白蘿（菊花）、肥前系陶器陶輪（大標1・Ⅱ期）、土解（底面直角）、底面直角（大日形）、南西系地盤混在地盤（白神・型式）などがある。
SK14	1区東半	SK76	SK12、馬鹿塚に切られる。長軸約3m、短軸約1.6mの楕円形を呈し、深さ0.3mを測る。背芦塚、白蘿（菊花）、肥前系陶器陶輪（大標1・Ⅱ期）、土解（底面直角）、底面直角（大日形）、南西系地盤混在地盤（白神・型式）などがある。
SK15	1区東半	SK10	SK12、石垣に切られる。長軸約2m、短軸約1.6mの楕円形を呈し、深さ0.6~7mを測る。遺物はなく、土解（底面直角）、馬鹿塚（大日形）、土解（底面直角）、底面直角などがある。
SK16	1区東半	SK24	SK12、石垣に切られる。長軸約2m、短軸約1.6mの楕円形を呈し、深さ0.6~7mを測る。遺物はなく、土解（底面直角）、馬鹿塚（大日形）、土解（底面直角）、底面直角などがある。
SK17	1区東半	SK17	SK12、石垣に切られる。長軸約2m、短軸約1.6mの楕円形を呈し、深さ0.6~7mを測る。遺物はなく、土解（底面直角）、馬鹿塚（大日形）、土解（底面直角）、底面直角などがある。
SK18	1区東半	SK36	SK12、石垣に切られる。長軸約2m、短軸約1.6mの楕円形を呈し、深さ0.6~7mを測る。背芦塚、白蘿（菊花）、肥前系陶器陶輪（大日形）、土解（底面直角）、底面直角（大日形）、南西系地盤混在地盤（白神・型式）などがある。
SK19	2区	SK1	SK9を切り、各段10cm切られる。調査区P区に正確なる地形が示す。深さ0.6~9mを測る。表面は2.1層、下層（時化鉱物）が認められる。本層は主として、奈良系陶器（白神・型式）、南西系地盤混在地盤（白神・型式）、土解（底面直角）、馬鹿塚（大日形）、土解（底面直角）、底面直角などがある。
SK20	2区	SK4	SK9を切り、各段10cm切られる。調査区P区に正確なる地形が示す。深さ0.6~9mを測る。背芦塚、白蘿（菊花）、肥前系陶器陶輪（大日形）、土解（底面直角）、底面直角（大日形）、南西系地盤混在地盤（白神・型式）などがある。
SK21	2区	SK6	SK9を切り、各段10cm切られる。長軸約3m、短軸約1.6mの楕円形を呈し、深さ0.6~9mを測る。背芦塚、白蘿（菊花）、肥前系陶器陶輪（大日形）、土解（底面直角）、底面直角（大日形）、南西系地盤混在地盤（白神・型式）などがある。
SK22	2区	SK13	SK9を切り、各段10cm切られる。長軸約3m、短軸約1.6mの楕円形を呈し、深さ0.6~9mを測る。背芦塚、白蘿（菊花）、肥前系陶器陶輪（大日形）、土解（底面直角）、底面直角（大日形）、南西系地盤混在地盤（白神・型式）などがある。
SK23	2区	SK19	SK9を切り、各段10cm切られる。長軸約3m、短軸約1.6mの楕円形を呈し、深さ0.6~9mを測る。背芦塚、白蘿（菊花）、肥前系陶器陶輪（大日形）、土解（底面直角）、底面直角（大日形）、南西系地盤混在地盤（白神・型式）などがある。
SK24	2区	SK32	SK9を切り、各段10cm切られる。長軸約3m、短軸約1.6mの楕円形を呈し、深さ0.6~9mを測る。背芦塚、白蘿（菊花）、肥前系陶器陶輪（大日形）、土解（底面直角）、底面直角（大日形）、南西系地盤混在地盤（白神・型式）などがある。
SK25	2区	SK29	SK9を切り、各段10cm切られる。長軸約3m、短軸約1.6mの楕円形を呈し、深さ0.6~9mを測る。背芦塚、白蘿（菊花）、肥前系陶器陶輪（大日形）、土解（底面直角）、底面直角（大日形）、南西系地盤混在地盤（白神・型式）などがある。
SE1	1区東半	SE1	石垣基盤に切られる。石垣内側に2段階を呈する。底面は2mを測る。背芦塚、白蘿（菊花）、肥前系陶器陶輪（大日形）、土解（底面直角）、底面直角（大日形）、南西系地盤混在地盤（白神・型式）などがある。
SE2	1区東半	SK9・SK30	石垣基盤に切られる。石垣内側に2段階を呈する。底面は2mを測る。背芦塚、白蘿（菊花）、肥前系陶器陶輪（大日形）、土解（底面直角）、底面直角（大日形）、南西系地盤混在地盤（白神・型式）などがある。
SE3	1区東半	SK25	石垣基盤に切られる。石垣内側に2段階を呈する。底面は2mを測る。背芦塚、白蘿（菊花）、肥前系陶器陶輪（大日形）、土解（底面直角）、底面直角（大日形）、南西系地盤混在地盤（白神・型式）などがある。
SE4	1区東半	SE5	石垣基盤を認める。石垣内側に1.5mで横壁が設けられ、石垣内側1.5m、外側2mを測る。背芦塚、白蘿（菊花）、肥前系陶器陶輪（大日形）、土解（底面直角）、底面直角（大日形）、南西系地盤混在地盤（白神・型式）などがある。
SE5	1区西半	SE4	石垣基盤を認める。石垣内側に1.5mで横壁が設けられ、石垣内側1.5m、外側2mを測る。背芦塚、白蘿（菊花）、肥前系陶器陶輪（大日形）、土解（底面直角）、底面直角（大日形）、南西系地盤混在地盤（白神・型式）などがある。
SDH01	1区西半	SD1	石垣内側に1.5mで横壁が設けられ、石垣内側1.5m、外側2mを測る。背芦塚、白蘿（菊花）、肥前系陶器陶輪（大日形）、土解（底面直角）、底面直角（大日形）、南西系地盤混在地盤（白神・型式）などがある。
SDH01	1区東半	SD1	石垣内側に1.5mで横壁が設けられ、石垣内側1.5m、外側2mを測る。背芦塚、白蘿（菊花）、肥前系陶器陶輪（大日形）、土解（底面直角）、底面直角（大日形）、南西系地盤混在地盤（白神・型式）などがある。
SA101	1区西半	SP15・16・18・19	石垣内側に1.5mで横壁が設けられ、石垣内側1.5m、外側2mを測る。背芦塚、白蘿（菊花）、肥前系陶器陶輪（大日形）、土解（底面直角）、底面直角（大日形）、南西系地盤混在地盤（白神・型式）などがある。
SB101	2区	SB101	SB101を切る。正反対を土解（底面直角）。柱径約1.5m、東西2.4m、南北1.8mを測る。東西側に開口部は2.2mと一定ではない。柱径約1.2~1.4mを測り、深さ約1.5mが存在し、柱径約1.3~3.0mであった。柱穴上部は大きく削離されているものと見受けられる。
SB102	2区	SB113	SB101を切る。東西2.4mで南北1.8mを測る。南北1.8mで東西2.4mを測る。柱穴上部は2.2mと一定ではない。
SB103	2区	SB107	SB101を切る。東西2.4mで南北1.8mを測る。柱穴上部は2.2mと一定ではない。柱穴上部は大きく削離されているものと見受けられる。
SB104	2区	SB101	SB104を切る。柱穴上部は2.2mと一定ではない。柱穴上部は大きく削離されているものと見受けられる。
SB105	2区	SB110	SB104を切る。南北正反対を土解（底面直角）。柱径約1.5m、東西2.4m、南北1.8mを測る。柱穴上部は2.2mと一定ではない。
SB106	2区	SB110	SB104を切る。南北正反対を土解（底面直角）。柱径約1.5m、東西2.4m、南北1.8mを測る。柱穴上部は2.2mと一定ではない。
SB107	2区	SB101	SB104を切る。南北正反対を土解（底面直角）。柱径約1.5m、東西2.4m、南北1.8mを測る。柱穴上部は2.2mと一定ではない。
SB108	2区	SB103	SB104を切る。南北正反対を土解（底面直角）。柱径約1.5m、東西2.4m、南北1.8mを測る。柱穴上部は2.2mと一定ではない。

参考文献では、これらのものを防ぐための調査の実施を要請する旨の記載を有する。後に記載する「この調査結果によれば、本調査の範囲内に、既存の古墳等の遺跡が存在する」とあるが、これは既存の古墳等の遺跡が既存の古墳等の遺跡の範囲内に位置するものである。

参考調査の遺跡番号は、既存のものの中でも、最も多くの番号を有する。中でも、土解（底面直角）の番号を挙げている。

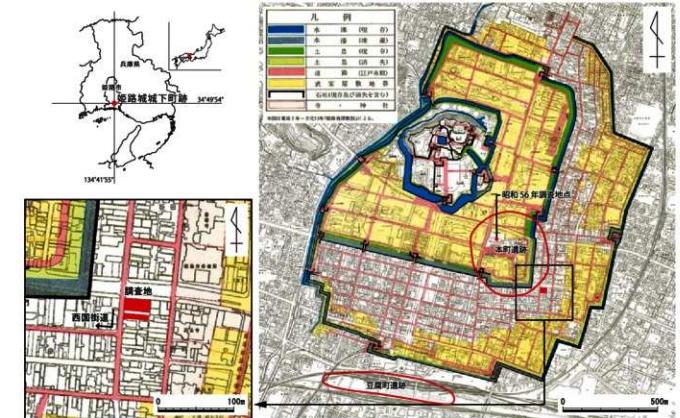


図1 調査位置図（姫路市2003『姫路城跡（城郭跡）』を一部変更・加筆 S=1/5,000・S=1/20,000）

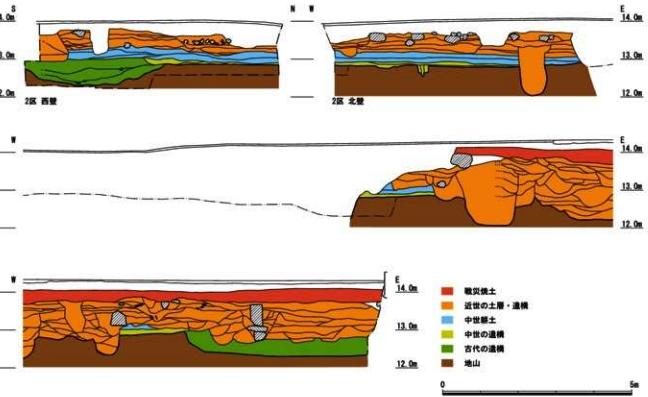


図2 調査区断面図（S=1/100）

図版 2

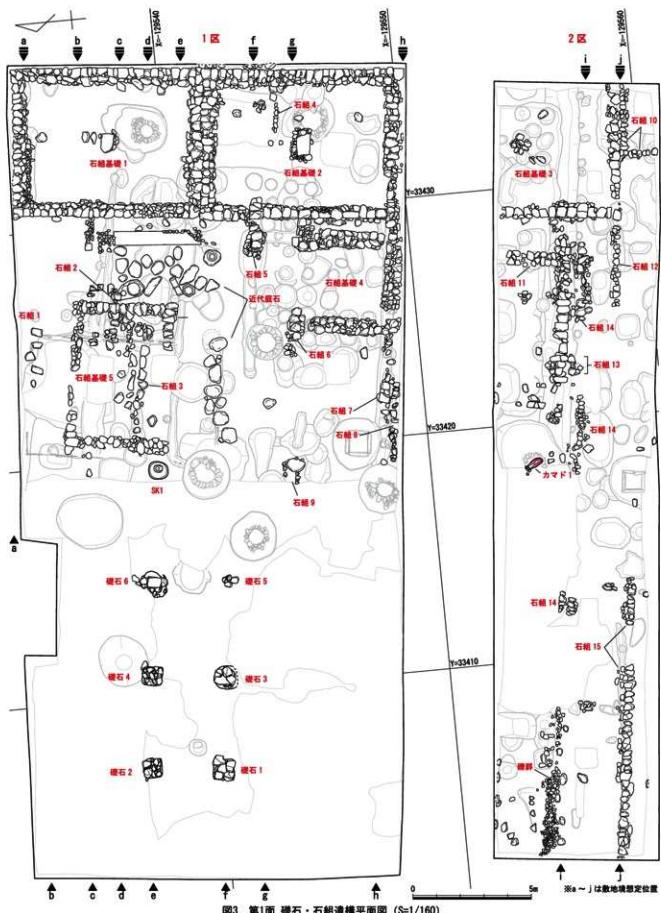


図3 第1面 硬石・石柱遺構平面図 (S=1/160)

図版 3

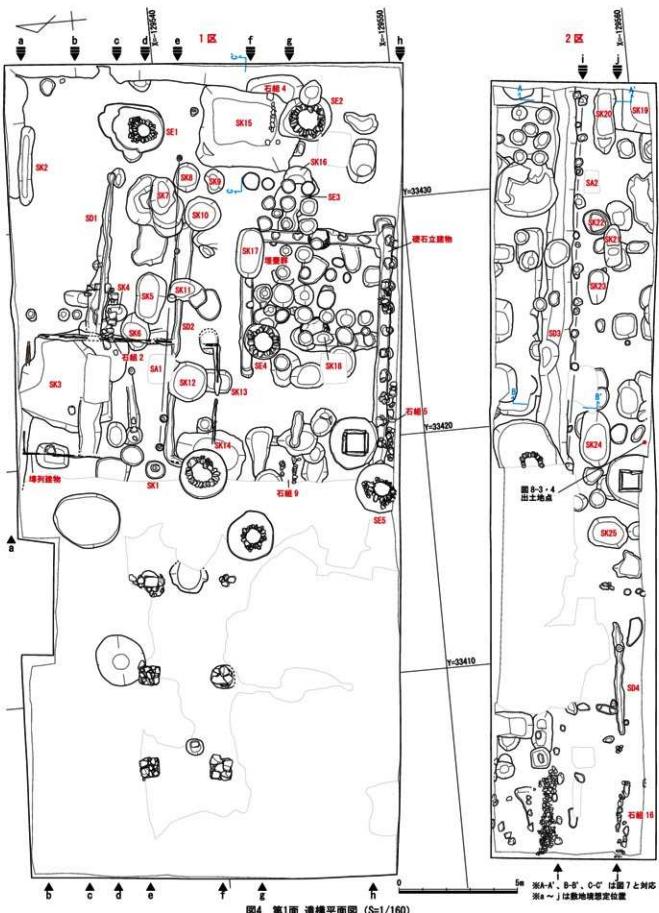


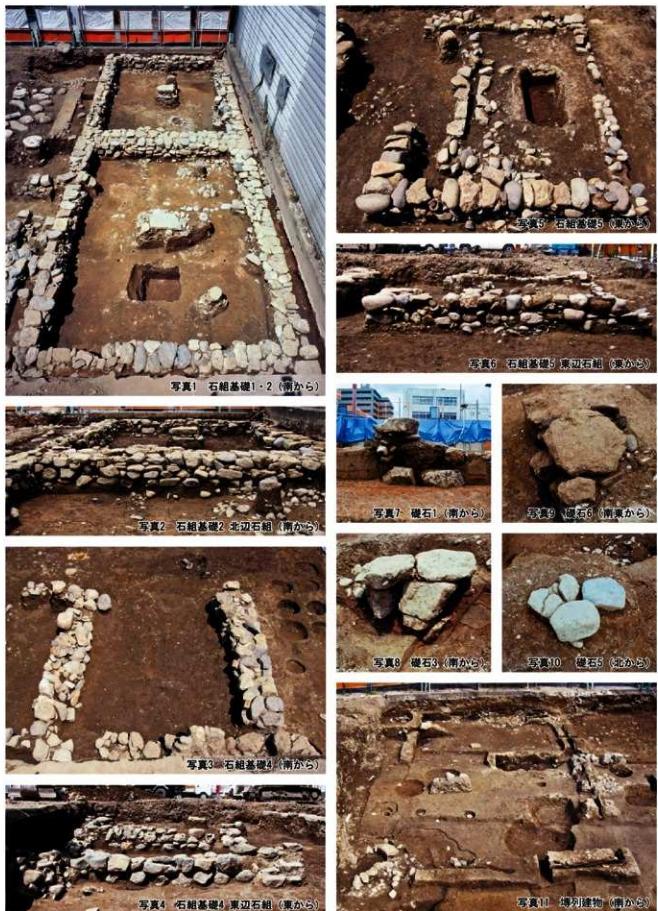
図4 第1面 遺構平面図 (S=1/160)

※a-k, b-g, c-f

は対応

※a-jは敷地境界位置

図版 4



図版 5

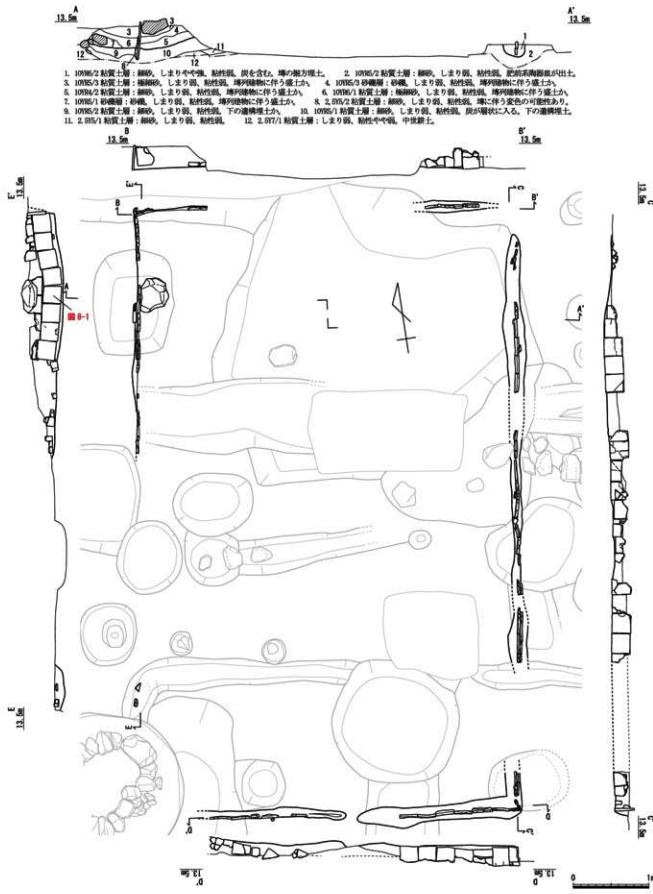
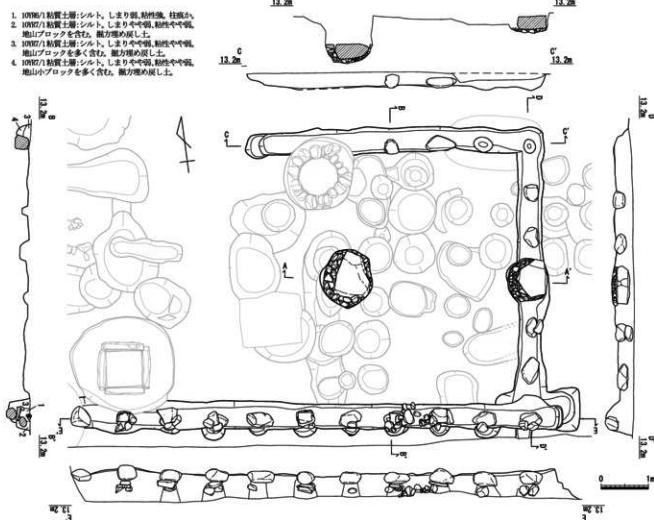


図5 塔列建物平・断・立面図 (S=1/50)

図版 6



図版 7

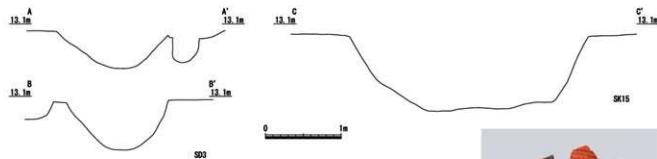
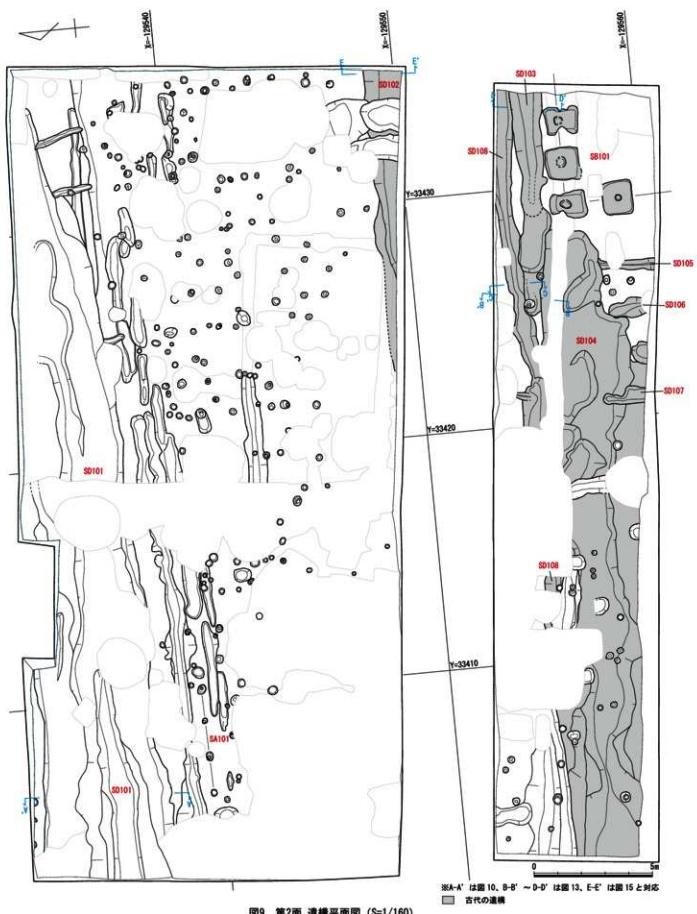


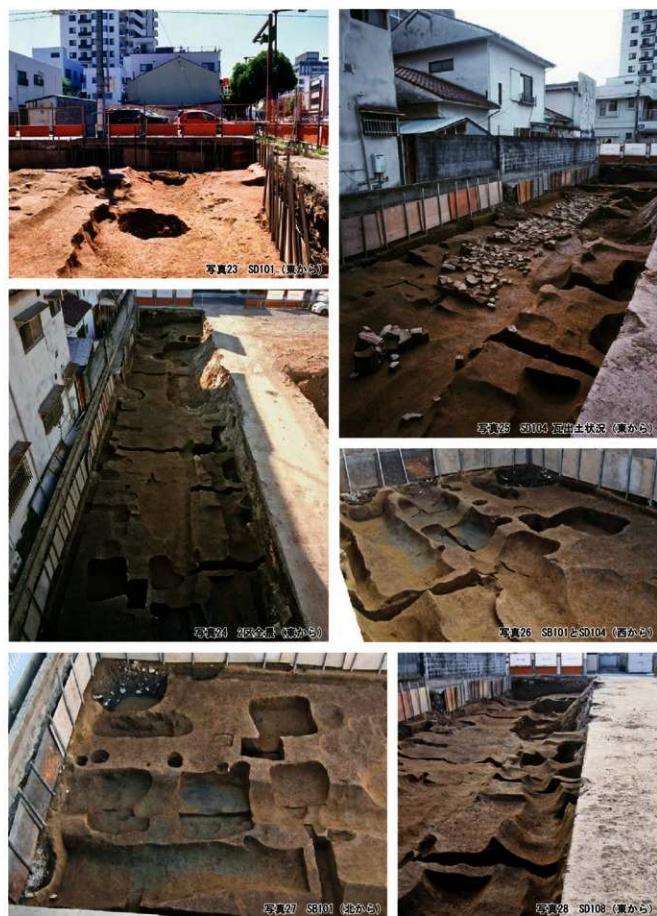
図7 近世遺構断面図 (S=1/50)



図版 8



図版 9



図版 10

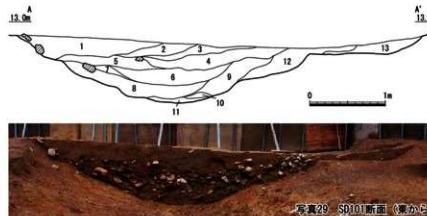


写真29 SD101断面図 (S=1/50)

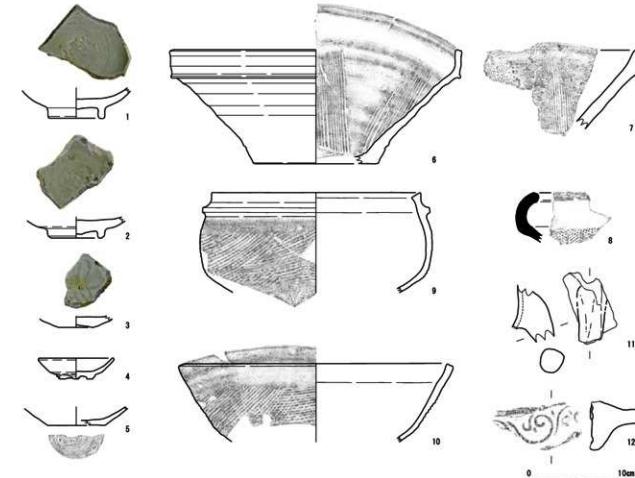


図11 SD101出土遺物 (S=1/4)

表2 SD101出土遺物観察表

種別	器形	計測値 (cm)		
		口径	径	高さ
1 青磁 瓶		(3.2)	6.0	1.1
2 青磁 瓶		(2.2)	6.0	1.0
3 青磁 瓶		(1.1)	3.6	
4 白磁 杯		7.8	2.2	3.5
5 土器 瓶		(1.9)	6.0	
6 陶器 備前 楕円		30.0	12.0	13.2
計測値 (cm)		口径	径	高さ
7 陶器 湯舟	楕円		(8.3)	
8 陶器 豆	圓盤		(5.3)	
9 上絵器 塗	壺	20.0	(16.6)	
10 上絵器 塗	壺	27.8	(8.3)	
11 上絵器 三足壺			(3.4)	
12 上絵器 平底	J.			

計測値のうち()内は現存部

- L 1000万前後土層：シルト、しまりやや堅、粘性強。
2. 100万前後土層：粘性強、しまりやや堅、粘性やや弱。
3. 100万前後土層：粘性強、しまりやや弱、粘性やや弱。地山ブロック多く含む。
4. 100万前後土層：粘性強、しまりやや弱、粘性やや弱。地山ブロック多く含む。
5. 100万前後土層：中堅程度、粘性強。
6. 100万前後土層：粘性強、しまりやや弱、粘性やや弱。地山ブロック多く含む。
7. 100万前後土層：シルト、しまりやや弱、粘性やや弱。
8. 100万前後土層：粘性強、しまりやや弱、粘性やや弱。地山ブロック多く含む。
9. 100万前後土層：粘性強、しまりやや弱、粘性やや弱。地山ブロック多く含む。
10. 100万前後土層：粘性強、しまりやや弱、粘性やや弱。地山ブロック多く含む。
11. 100万前後土層：粘性強、しまりやや弱、粘性やや弱。地山ブロック多く含む。
12. 100万前後土層：シルト、しまりやや弱、粘性やや弱。地山ブロック多く含む。
13. 2.0万前後土層：粘性強、しまりやや弱、粘性強。

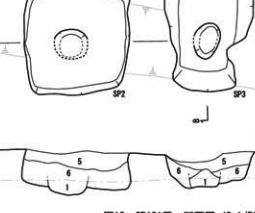


図12 SB101断面図 (S=1/50)

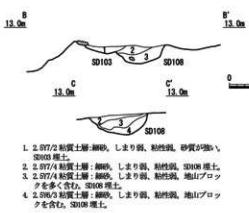


図13 SD103 - 108断面図 (S=1/50)

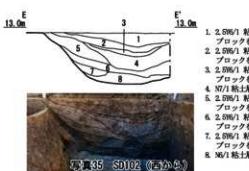


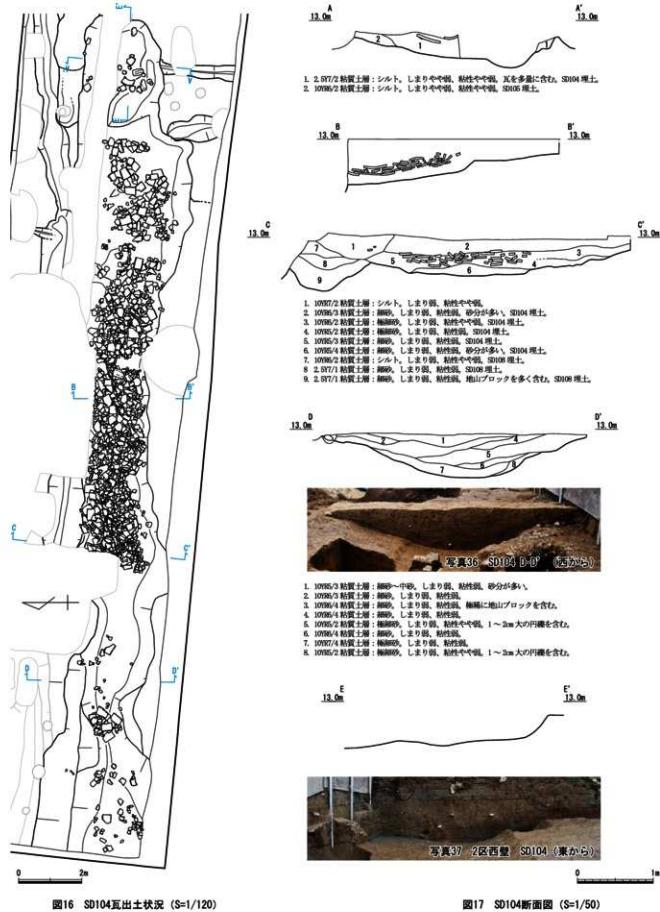
表3 SD108出土遺物観察表

種別	器形	計測値 (cm)		
		口径	高さ	高台高
1. 100万前後土層：粘性強、しまりやや弱、粘性やや弱。地山ブロック多く含む。	SD108			
2. 100万前後土層：粘性強、しまりやや弱、粘性やや弱。地山大ブロック多く含む。				
3. 100万前後土層：シルト、しまりやや弱、粘性やや弱。地山小ブロック多く含む。				
4. 100万前後土層：粘性強、しまりやや弱、粘性弱。				
5. 100万前後土層：粘性強、しまりやや弱、粘性弱。				
6. 100万前後土層：粘性強、しまりやや弱、粘性やや弱。地山ブロック多く含む。				
7. 100万前後土層：粘性強、しまりやや弱、粘性やや弱。地山大ブロック多く含む。				
8. 100万前後土層：粘性強、しまりやや弱、粘性やや弱。地山大ブロック多く含む。				

写真35 SD102 (東から)

図15 SD102断面図 (S=1/50)

図版 12



図版 13



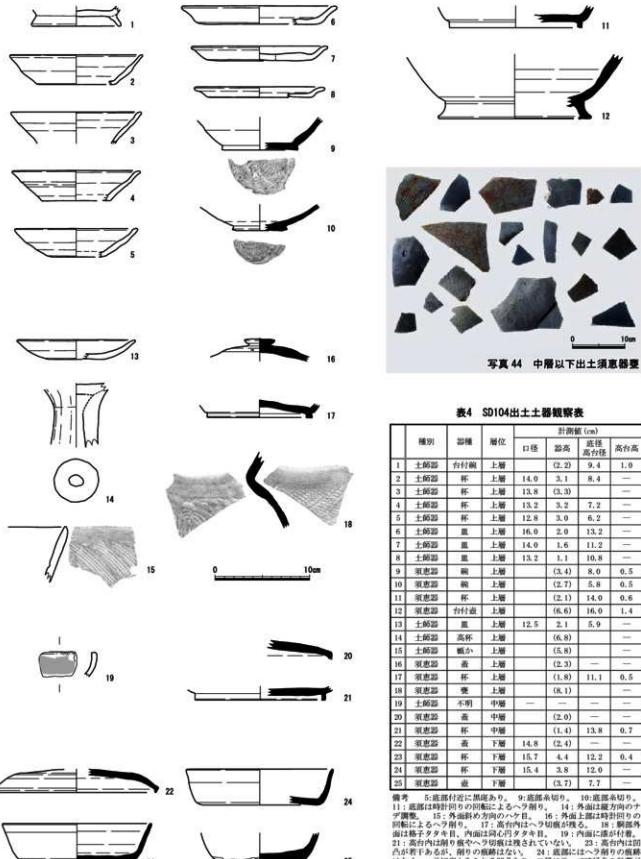


写真 44 中層以下出土須器類

表4 SD104出土土器観察表

種別	器種	層位	目測値 (cm)			
			口径	器高	底径	高台径
1	土師器	台付柄	上層	(2.2)	9.4	1.0
2	土師器	杯	上層	14.9	3.1	8.4
3	土師器	杯	上層	13.5	(3.3)	—
4	土師器	杯	上層	13.2	3.2	7.2
5	土師器	杯	上層	12.8	3.0	6.2
6	土師器	杯	上層	16.5	2.8	13.2
7	土師器	盆	上層	14.0	1.6	—
8	土師器	盆	上層	13.2	1.1	10.8
9	須器	杯	上層	(3.4)	8.0	0.5
10	須器	杯	上層	(2.7)	5.8	0.5
11	須器	杯	上層	(2.1)	14.0	0.6
12	須器	台付柄	上層	(6.6)	16.0	1.4
13	土師器	瓶	上層	12.5	2.1	5.9
14	土師器	高杯	上層	(6.8)	—	—
15	土師器	瓶	上層	(5.8)	—	—
16	須器	瓶	上層	(2.3)	—	—
17	須器	杯	上層	(1.8)	11.1	0.5
18	須器	甕	上層	(8.1)	—	—
19	土師器	不明	中層	—	—	—
20	須器	甕	中層	(2.0)	—	—
21	須器	杯	中層	(1.4)	13.8	0.7
22	須器	甕	下層	14.8	(2.4)	—
23	須器	杯	下層	15.7	4.4	12.2
24	須器	杯	下層	15.4	3.3	6.0
25	須器	甕	中層	(3.7)	7.7	—

備考：各器種は内面に施釉あり。外側は磨き、10：底盤切込み。
 11：底盤は斜面よりの断面を上から見ると、外側は腹方向のナブ調査。
 12：外縁斜面方向の内側を上から見ると、外側は腹方向のナブ調査。
 13：外縁斜面方向の内側を上から見ると、外側は腹方向のナブ調査。
 14：外縁斜面方向の内側を上から見ると、外側は腹方向のナブ調査。
 15：外縁斜面方向の内側を上から見ると、外側は腹方向のナブ調査。
 16：内面に磨き付有り。
 21：底盤内側削り痕や、ラミ歯は施されてない。
 23：台付柄内側削り痕や、ラミ歯は施されてない。
 24：外縁斜面方向の内側を上から見ると、外側は腹方向のナブ調査ではなく、へつ切込みのみの凹みあり。口縁に沿って複数個の施査が施されている。口縁の腹方向に施された施査より、施査成りは口縁が底盤の状態で施設されたことがわかる。
 25：底盤は斜面。

図19 SD104出土遺物1 (S-1/4)

目測値のうち、() 内は複数個

图版 15

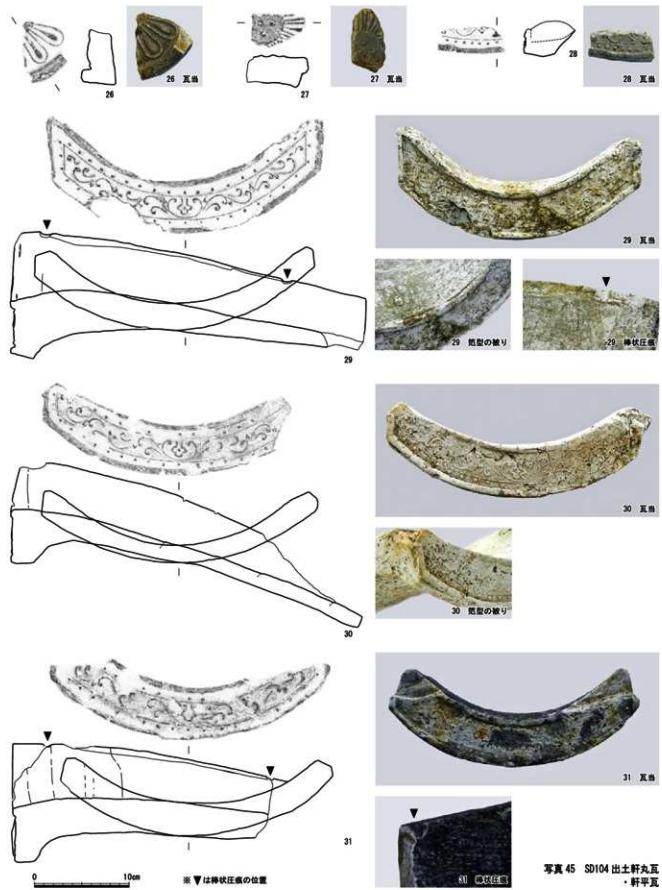


图20 SD104出土遗物2 (S=1/4)

写真45 SD104出土軒丸瓦
・軒平瓦

图版 16

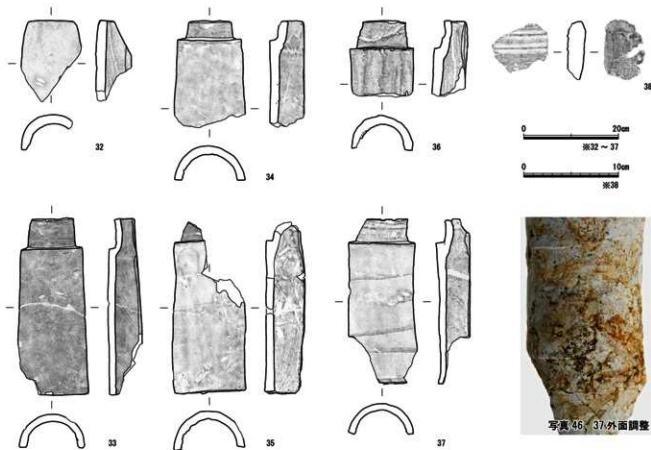


図21 SD104出土遺物3 (S=1/4・1/8)

表5 SD104出土丸瓦觀察表

※計測値のうち斜字は推定値

表6 SD104出土軒丸瓦・軒平瓦觀察表

24 上海申升三樂連鎖公司 2.0 0.0 1.6 7 250711 落實版

累計測定のうち、() 付は残存値

図版 17

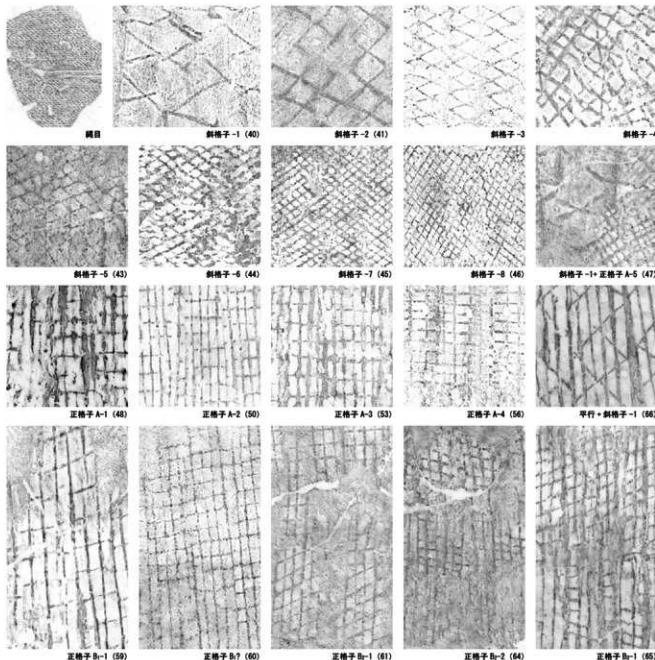


図23 SD104 平瓦のタタキ目 (S=1/4)

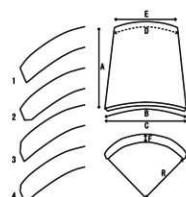


図24 平瓦の側縁模様と平瓦凡例

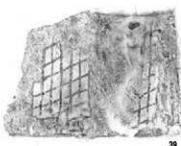


図25 タタキ原体の幅がわかる資料 (S=1/4)

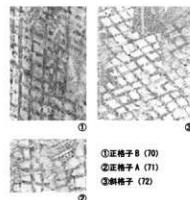


図26 SD104 貫斗瓦のタタキ目 (S=1/4)

図版 18

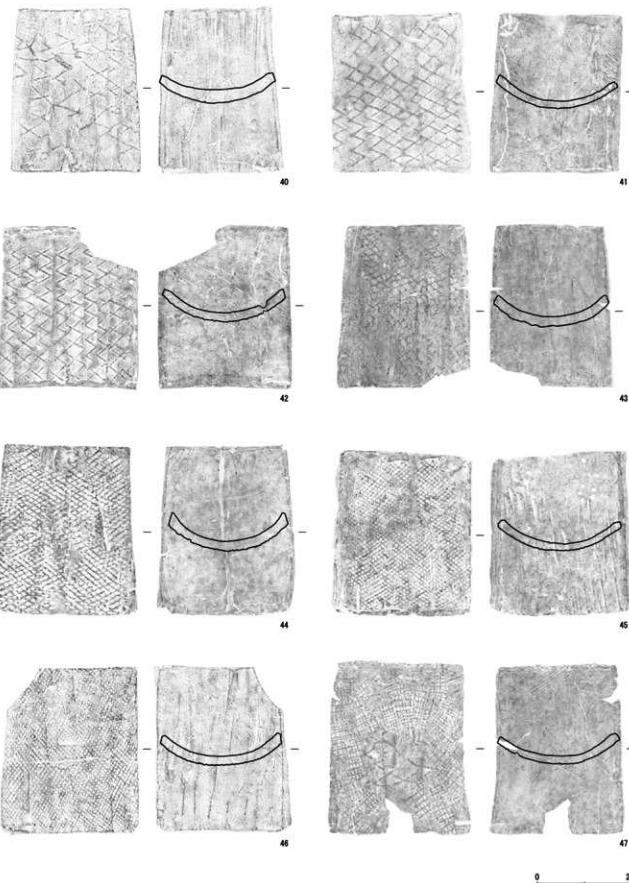


図27 SD104出土遺物3 (S=1/8)

0 20cm

圖版 19

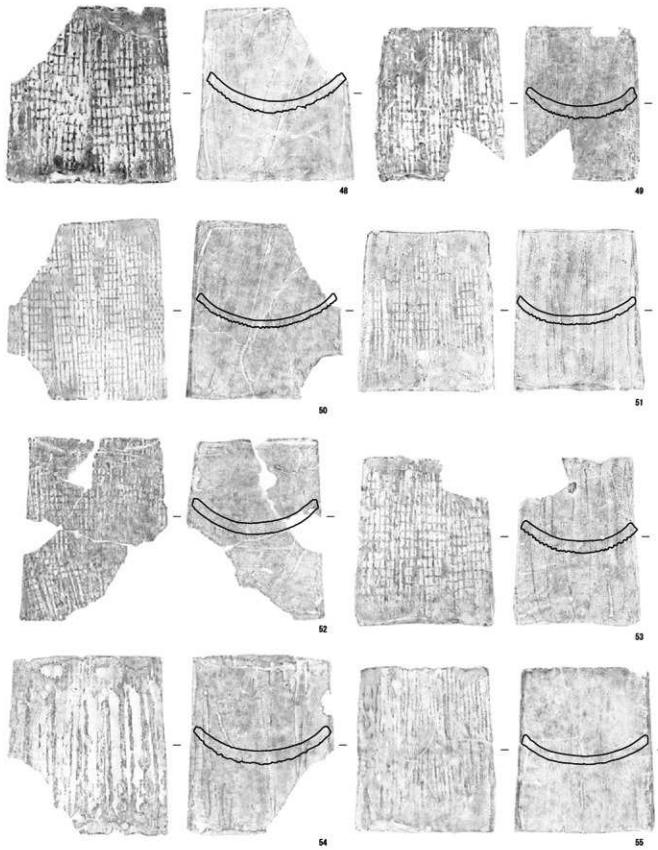


圖28 SD104出土遺物4 (S=1/8)

0 20cm

圖版 20

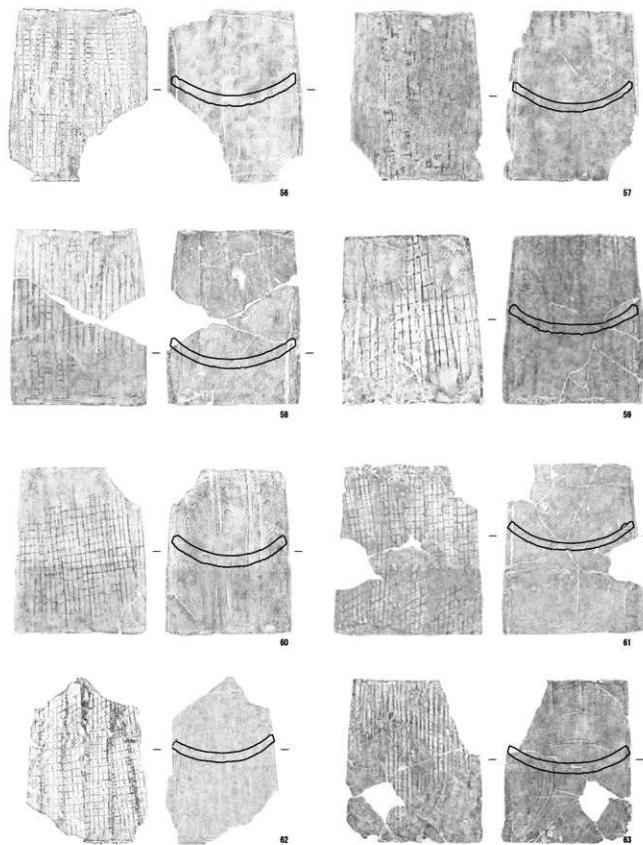


圖29 SD104出土遺物6 (S=1/8)

0 20cm

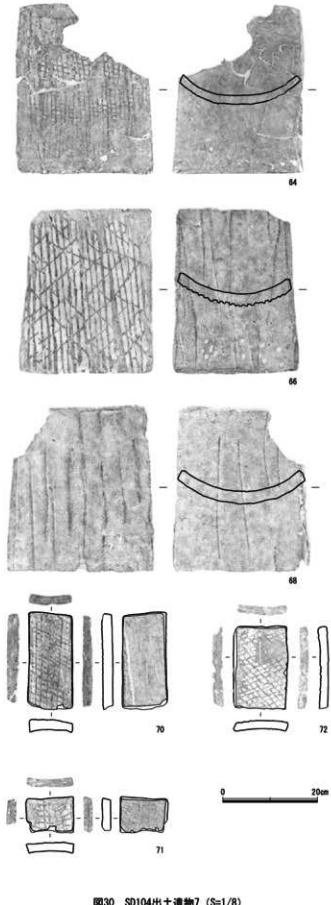


図30 SD104出土遺物7 (S=1/8)

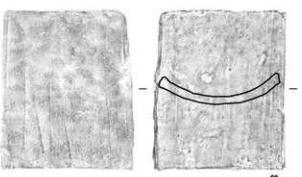
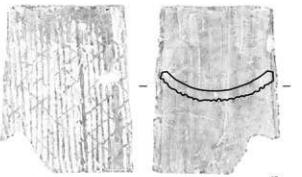
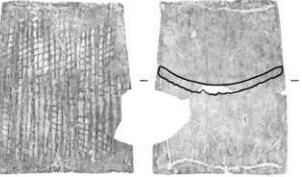


写真47 46 広縫部角の面取り

写真48 46 窪縫部角の面取り

表7 SD104出土平五輪表

タスキ	形態	計測値 (cm)	内面測量						外面測量						目録番号	色調
			A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L		
40	斜縫子-1	2	34.2	26.2	8.8	22.6	22.5	2.9	20.0	8	6	1.9	17.0	4	○	○
41	斜縫子-2	2	33.0	27.5	5.5	26.5	25.0	1.9	17.0	6	5	0	○	○	○	○
42	斜縫子-3	2	33.7	28.5	6.6	25.5	25.3	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
43	斜縫子-4	1	34.5	23.5	2.6	22.5	22.5	2.1	16.0	0	0	0	○	○	○	○
44	斜縫子-5	1	35.4	28.0	25.0	25.0	25.0	2.0	14.5	8	8	0	○	○	○	○
45	斜縫子-6	1	34.5	27.8	27.1	22.4	22.3	2.3	16.0	4	4	0	○	○	○	○
46	斜縫子-7	1	34.5	27.8	27.1	22.4	22.3	2.3	16.0	4	4	0	○	○	○	○
47	斜縫子-8	1	36.0	36.5	36	28.0	28.0	2.0	16.0	7.5	6	0	○	○	○	○
48	正筋子-1	1	37.7	32.1	21.0	22.4	22.4	2.4	16.5	5	5	0	○	○	○	○
49	正筋子-2	2	32.2	32.3	22.7	22.4	22.4	2.5	16.5	5	5	0	○	○	○	○
50	正筋子-3	2	36.0	36.0	36.0	22.9	22.9	2.5	16.5	5	5	0	○	○	○	○
51	正筋子-4	2	33.5	36.6	36	26.0	26.0	2.5	16.5	5	5	0	○	○	○	○
52	正筋子-5	2	38.8	9	25.7	26.0	2.4	17.0	4	4	0	○	○	○	○	○
53	正筋子-6	2	35.2	36.0	36	25.2	25.2	2.4	16.5	4	4	0	○	○	○	○
54	正筋子-7	2	38.0	38.0	38	26.0	26.0	2.4	16.5	4	4	0	○	○	○	○
55	正筋子-8	2	35.3	38.0	3	25.5	25.3	1.7	16.5	5	5	0	○	○	○	○
56	正筋子-9	4	36.0	36.0	36	25.5	25.5	2.2	16.5	5	5	0	○	○	○	○
57	正筋子-10	2	36.0	36.0	36	25.5	25.5	2.2	18.0	5	4	0	○	○	○	○
58	正筋子-11	2	36.0	36.0	36	25.5	25.5	2.2	18.0	5	4	0	○	○	○	○
59	正筋子-12	2	36.0	36.0	36	25.5	25.5	2.2	18.0	5	4	0	○	○	○	○
60	正筋子-13	2	36.0	36.0	36	25.5	25.5	2.2	18.0	5	4	0	○	○	○	○
61	正筋子-14	2	36.0	36.0	36	25.5	25.5	2.2	18.0	5	4	0	○	○	○	○
62	正筋子-15	2	36.0	36.0	36	25.5	25.5	2.2	18.0	5	4	0	○	○	○	○
63	正筋子-16	2	36.0	36.0	36	25.5	25.5	2.2	18.0	5	4	0	○	○	○	○
64	正筋子-17	2	36.0	36.0	36	25.5	25.5	2.2	18.0	5	4	0	○	○	○	○
65	正筋子-18	2	36.0	36.0	36	25.5	25.5	2.2	18.0	5	4	0	○	○	○	○
66	正筋子-19	2	36.0	36.0	36	25.5	25.5	2.2	18.0	5	4	0	○	○	○	○
67	正筋子-20	2	36.0	36.0	36	25.5	25.5	2.2	18.0	5	4	0	○	○	○	○
68	正筋子-21	2	36.0	36.0	36	25.5	25.5	2.2	18.0	5	4	0	○	○	○	○
69	正筋子-22	2	36.0	36.0	36	25.5	25.5	2.2	18.0	5	4	0	○	○	○	○
70	正筋子-23	2	36.0	36.0	36	25.5	25.5	2.2	18.0	5	4	0	○	○	○	○
71	正筋子-24	2	36.0	36.0	36	25.5	25.5	2.2	18.0	5	4	0	○	○	○	○
72	正筋子-25	2	36.0	36.0	36	25.5	25.5	2.2	18.0	5	4	0	○	○	○	○

表7 SD104出土平五輪表

タスキ	形態	計測値 (cm)	内面測量						外面測量						目録番号	色調
			A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L		
73	正筋子-26	2	34.2	26.2	8.8	22.6	22.5	2.9	20.0	8	6	1.9	17.0	4	○	○
74	正筋子-27	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
75	正筋子-28	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
76	正筋子-29	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
77	正筋子-30	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
78	正筋子-31	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
79	正筋子-32	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
80	正筋子-33	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
81	正筋子-34	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
82	正筋子-35	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
83	正筋子-36	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
84	正筋子-37	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
85	正筋子-38	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
86	正筋子-39	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
87	正筋子-40	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
88	正筋子-41	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
89	正筋子-42	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
90	正筋子-43	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
91	正筋子-44	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
92	正筋子-45	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
93	正筋子-46	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
94	正筋子-47	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
95	正筋子-48	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
96	正筋子-49	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
97	正筋子-50	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
98	正筋子-51	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
99	正筋子-52	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
100	正筋子-53	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
101	正筋子-54	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
102	正筋子-55	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
103	正筋子-56	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
104	正筋子-57	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
105	正筋子-58	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
106	正筋子-59	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
107	正筋子-60	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
108	正筋子-61	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
109	正筋子-62	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
110	正筋子-63	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
111	正筋子-64	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
112	正筋子-65	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
113	正筋子-66	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
114	正筋子-67	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
115	正筋子-68	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
116	正筋子-69	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
117	正筋子-70	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
118	正筋子-71	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0	1.9	17.0	4	4	0	○	○	○	○
119	正筋子-72	2	33.7	28.5	6	26.5	25.0									

報告書抄録

ふりがな	ひめじょうじょうかまちあと								
書名	姫路城城下町跡								
副書名	姫路城跡第338次発掘調査報告書								
卷次									
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告								
シリーズ番号	第43集								
編著者名	黒田 祐介								
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター								
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1								
発行年月日	平成29年(2017年)3月31日								
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	調査番号
		市町村	遺跡番号						
姫路城城下町跡	姫路市平野町 39番・40番	28201	020169	34° 49' 54"	134° 41' 55"	2015.6.25 ~ 2015.10.28	772m ²	共同住宅建設	2015 0117
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構			主な遺物		
姫路城城下町跡	集落跡	近世	石組基礎・礎石立建物・埠列建物・礎石・土坑・溝・井戸・掘立柱列	陶磁器・埠・瓦					
		中世	掘立柱列・柱穴・溝	須恵器・土師器・瓦					
		古代	掘立柱列・溝	須恵器・土師器・瓦					
要約	近世の遺構は非常に良好な保存状態で、町屋に伴う遺構を多数確認した。遺構の位置により、間口に建物、裏手に廐棄土坑などを伴う空閑地、その間に井戸が配される典型的な町屋の姿を復元できた。また石組基礎を伴う礎が確認できたほか、姫路城城下町跡で初となる全形がわかる埠列建物を確認した。								
	また、その下層からは中世・古代の遺構を多数確認した。特に、古代の遺構としては大型の方形掘方を伴う掘立柱建物や溝がみつかり、溝からは大量の瓦が出土した。このことで、調査地の近辺に瓦葺建物が存在した可能性が高まった。								

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第43集

姫路城城下町跡

—姫路城跡第338次発掘調査報告書—

平成29年(2017年)年3月31日発行

編集	姫路市埋蔵文化財センター 〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1 TEL(079)252-3950
発行	姫路市教育委員会 〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地
印刷・製本	株式会社デイリー印刷 〒671-0218 兵庫県姫路市飾東町庄57番地2